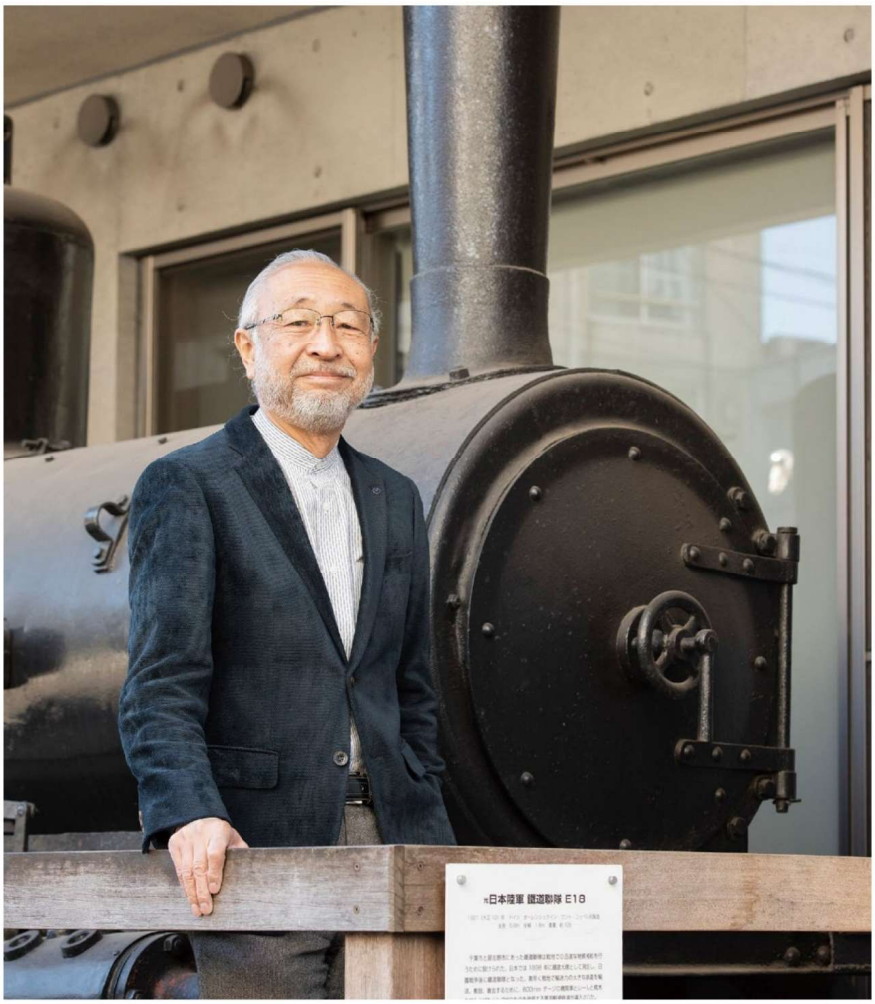
konohito・tazunete

この人 訪ねて

HIRAI KENTARO

平井憲太郎さん

●東京池袋西ロータリークラブ



へぼ、ぼ、ぼくらは少年探偵団

子どもの頃に友達とよく歌った「少年探偵団」の主題歌である。その歌詞を、ぼくは取材に行く地下鉄の中でマスク越しにつぶやいていた。懐かしいなぁ。怪人二十面相と戦う小林少年、そして名探偵、明智小五郎。怪人二十面相ごっこという遊びも流行っていたっけ。ぼくが小学生時代、はるかな昔。

なぜこんなふうに書き始めたか。今回の取材相手がこのヒーローの生みの親、日本におけるミステリーの開拓者である作家、江戸川乱歩（1894～1965　本名・平井太郎）の孫、平井憲太郎さんだからだ。

平井さんの肩書は、東京都練馬区にある、（株）エリエイの代表取締役社長。『とれいん』という鉄道模型の月刊誌を発行している。アポを取ろうと連絡すると、

「まず会社で会いましょうか。会社の前に蒸気機関車があります。写真撮影するのにはいいかも。それから、祖父が住んでいた自宅は現在、立教大学の管理下にあるので広報に話を通してくだ

さい。一般公開しているのは週に2～3日です」

取材日の午前10時、大江戸線新江古田駅から徒歩5分ほどで、エリエイが入るマンションに到着。ありました！　確かに本物の機関車が。「元日本陸軍鐵道聯隊（てつどうれんたい）　E18」という説明板が付いていた。

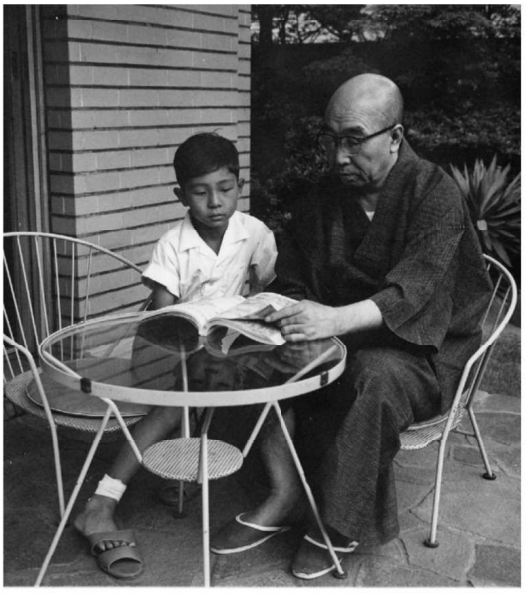
ドイツから1921年に輸入された25両のうちの1両という。太平洋戦争の終戦を千葉の兵器補給廠（しょう）で迎え、その後、砂利採取線で使用されたが50年代に廃車。ユネスコ村などで展示されていたが紆余（うよ）曲折を経て93年にこの場所に。事務所の建て替えや車両整備で一時期姿を消したが再登場。今や会社のシンボルとして存在感を示している。

平井さんは身長180センチ。髪の毛を後ろで束ね、姿勢良く大股で歩く姿はとても70歳には見えず若々しい。生まれ育ちは池袋にある立教大学隣の江戸川乱歩邸。70歳で江戸川乱歩が亡くなった時は中学3年生だった。

「祖父は晩年、長くパーキンソン病で苦しんでいましたが、死因は脳出血でした。突然の死で私は中学のクラブ活動の旅行で不在。通夜の日に東京に戻って来たと思います。日本推理作家協会が青山葬儀所で協会葬をしてくださり、有名人がたくさん来られたのを覚えています」

幼時から怪人二十面相より鉄道模型作りに熱中

平井さんは父、隆太郎さんが立教大学教授だったこともあって小学校から大学まで立教に通った。高校は埼玉県新座市にあって、電車通学だったそうだ。少年探偵団の歌や怪人二十面相ごっこの思い出について聞いた。



上：ロータリーのイベントで受付をする乱歩（中央のベレー帽をかぶった人）　下：平井さんと乱歩／本人写真提供

「子どもの頃、近くの悪ガキの後について遊んだこともあります。やがて鉄道模型に熱中するようになり、自宅にこもっていました」

この趣味が後の平井さんの人生を決定づける。池袋や神田にあった模型店の常連になった。鉄道模型を作り始めると時間を忘れた。高校では鉄道研究会に入部。ここで1年先輩の松本謙一さんと出会う。一緒に汽車の写真を撮る旅もした。鉄道仲間の紹介で、高校2年になると創刊直後の『鉄道ジャーナル』でアルバイトを始めた。コラムの割り付けや原稿の手直しまで任された。

「原稿の書き方もここで教えてもらいました。国鉄（当時）の許可をもらって、カメラ片手に一人で取材に行くのは楽しかった。何より旅費を出してもらえるわけですから」

高校3年の時に立教大学1年の松本さんと『煙』という写真集を自費出版。全国各地の蒸気機関車

旧江戸川乱歩邸の土蔵の中で。立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター協力

を撮影した本で定価２５００円、初版は２０００部だった。販路はなかった。書店や鉄道模型店を本を抱えて回ったという。幸いカメラ誌にも紹介され、結局５００部重版して１００万円以上のもうけが出たそうだ。

「当時の大学卒の初任給が５万円以下です。２５００円の写真集がこれほど売れるとは思ってもいませんでした。鉄道模型専門店や鉄道写真家など、多くの人脈もできました」

この本がきっかけで出版業界に関心を抱く。大学卒業後に松本さんの父が経営していた呉服取扱会社エリエイに入って出版部を作る。ここで定期刊行物として鉄道模型の専門誌『とれいん』を出すことになるのだが、いきなりの挑戦である。冒険といえるだろう。

「就活も全くしませんでした。両親も就職については本人任せで、一切口を出さなかった。『鉄道ジャーナル』でアルバイトをしたので競合誌を出すのは気が引けたし、鉄道模型に特化した雑誌は1誌だけだったので。広告集めなど大変でしたが、何より趣味が仕事になるわけですから楽しかった」

『とれいん』の発行部数は1万数千部と決して多くはなかったが、40年以上たった現在もファンには人気だ。後にエリエイは呉服部門から撤退、出版業務が主体となった。平井さんは初代編集長として25年ほど現場の編集業務に携わったが、50歳直前で若手に編集を任せて一線からは退いている。

「最近、私が出社するのは週に2回ほど。社員は6人ですが、今は新型コロナ感染拡大でリモートで仕事をする人もいて、全員がそろうことはあ

工作室での緻密な作業

りません」

池袋にある平井さんの個人事務所に場所を移すと、入り口には「日本鉄道模型の会」のプレートも。平井さんが理事長を務める組織で事務局にもなっている。応接室に高さ3㍍、幅1・5㍍ほどの大きなベッドのような板が立て掛けてあった。裏面には複雑な電気配線が。

「これをバタンと倒せば模型の車両を走らせる線路になります。今はディスプレーを作り変えている途中。20年ほど前に作ったのですが、鉄道模型ファンはやはり実際に機関車が走らないと満足しません。鉄道模型は人の乗れる大きなものから、テーブルで楽しめる小さなものまでありますが、ここにあるのは実物の87分の1、80分の1が大半です」

実際に鉄道模型を作る作業を見せていただいた。応接室の隣には工作室があって、さまざまな工具が壁に掛けられている。とても細かい作業であるに違いない。何より手先の器用さが求められるはず。平井さんは鉄道模型だけでなく、テーブルや本棚なども手作りするそうだ。

「私は設計図面から作ります。鉄道模型完成まで半年とか、1年以上かかることもあります」

というから「趣味」のレベルを超えている。日本鉄道模型の会では東京ビッグサイトで国際コンベンションを開いたこともあるそうだ。

祖父からの隔世遺伝か 模型や工具、資料も整理得意

事務所には江戸川乱歩の資料も数多くあった。家族写真集やスクラップブックなどを、応接室併設の資料庫から出していただいた。鉄道模型の備品や工具、資料の整理もキチンとされてある。祖父の乱歩は46回引っ越した場所を克明に記録するなど整理魔としても有名だった。

「父はほとんど記録の整理はしなかったので、私に隔世遺伝したのでしょう。祖父の多くの資料は旧江戸川乱歩邸にありますから、そろそろ行ってみましょうか」

立教大学隣にある乱歩邸は、江戸川乱歩記念大衆文化研究センターという名称になっている。事務所から100㍍もない。歩いて1分の場所だ。

「祖父の自宅はとても広かったけれど、しょっちゅう雨漏りがして大変でした。2002年2月に立教大学に譲渡しましたが、私は曽祖母、祖父母、両親と生まれてからずっと住みましたので思い出深い場所です」

門には乱歩こと祖父、平井太郎と父、平井隆太郎の表札が。応接室には江戸川乱歩が晩年食事の時に愛用した椅子（パーキンソン病だったため、背に首の支えが付いている）などがあった。一番見たいと思っていた「幻影城」と呼ばれる土蔵の中に立教大学広報課のご厚意で入れていただいた（内部は一般公開されていない）。土蔵の入り口すぐの書籍棚には外国の原書がびっしり。乱歩は英語が達者で、エラリー・クイーンら海外の推理小説作家とも自ら英文タイプで文通していたそうだ。

平井さんは子どもの頃から乱歩のミステリーはほとんど自宅で読んでいたが、長い文章を書くのが苦手で、作家になろうと思ったことは一度もなかったそうだ。乱歩の死後、著作権継承者は父だったが、病に倒れたこともあってか、代行業務をしていたそうだ。平井さんが一線から退いた理由はこれだった。現在、著作権は切れているが、今でも江戸川乱歩に関わる照会があるという。

平井さんは1998年に東京池袋西ロータリークラブ（RC）に入会した。乱歩が東京池袋RCの創立会員だったことを知ったのはその後だった。父に聞くと、乱歩は作家としてロータリーに登録されたことを喜んでいた、と。平井さんは都内や千葉、神奈川県のロータリークラブに呼ばれて祖父、江戸川乱歩について30回以上卓話で語ったそうだが、このことは必ず話すことにしているという。

設計図面から鉄道模型完成まで、1年以上かかることもある

◇**平井憲太郎（東京池袋西RC会員）** 1950年生まれ。（株）エリエイ代表取締役社長。日本鉄道模型の会理事長、としまユネスコ協会代表理事。幼時から鉄道、鉄道模型に興味を持ち大学卒業後、エリエイに入社して出版部門を立ち上げ鉄道模型専門誌『とれいん』を出版。2007年から現職。

記事／山本朋史　乱歩作品では『屋根裏の散歩者』が好きで読み直した69歳。
撮影／工藤隆太郎　フリーカメラマン。地元秋田の撮影がライフワーク。